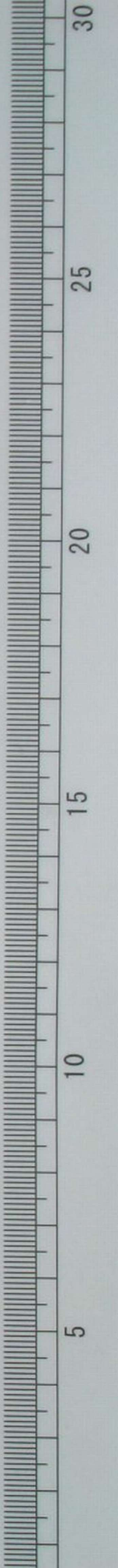


特別  
14  
1919  
90







熱海贅談

卷







一 匿名と匿名と 朝活と匿名

一 匿名の動機

(甲) 為私的

(一) 匿名

「非をせよ」といふ事(匿名)は、  
(一) 匿名の動機

匿名の動機(匿名)は、  
(一) 匿名の動機

匿名の動機(匿名)は、  
(一) 匿名の動機

匿名の動機(匿名)は、  
(一) 匿名の動機

匿名の動機(匿名)は、  
(一) 匿名の動機

匿名の動機(匿名)は、  
(一) 匿名の動機

(二) 匿名の動機  
匿名の動機

匿名の動機



(3) 山王 聖と奥せしめんがん

(4) 名を... 山王... 奥せしめんがん

(1) 聖と奥せしめんがん

破部 專一

喜記 子 為 揚

(乙) 為 徳 的

(2) 聖と奥せしめんがん

難あり... 聖と奥せしめんがん

(3) 聖と奥せしめんがん

難あり... 聖と奥せしめんがん







A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the two outermost columns being the widest. There are small blue marks on the left edge of the page.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. The columns are of varying widths, with the two outermost columns being the widest. There is a small blue mark on the right edge of the page.

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

透  
透  
日  
終



德育論綱要

(第一) 我々教育界の緊急な問題

- 一 大急務 — 徳教の振興 — 四文四語の統一
- 二 大急務 — 徳教の振興 — 四文四語の統一
- 三 大急務 — 宗制、學統 — 女子教育 — 教育者

成

(第二) 教育の原理と歴史 — 吾々の教育界の緊急な問題

先及教育の

教育の歴史 — 吾々の教育界の緊急な問題



究竟、目的如何——所謂三育の關係——  
我々の教育の理想——教育に於ける徳教の位置

(第三) 我々徳教類聚の現状——由来——救済策

醫家の慣手ぬきと做し——病者の診察——主  
の症候ぬき——其の経過とあり——其の種  
はあり——病者の診断——病者の鑑別——  
其の要因(先天的)——其の後因(後天的)  
——治すべし——病因と得るべき——病因  
——治療法——外用的——政治的——内  
用的——教育的(德育方策)——社会病

興徳原製

と治せんとす——其を是つ個人病を治療す  
ることをおぼし

(第四) 徳教類聚及個人階級の加害者

個人作正の因縁と疾病の因縁——疾病  
と不道徳——何故、体的疾病の治療法  
と道徳と心的疾病の治療法は進ませ  
る——*Complexity*——*Shadows*  
*Shadows* 理論的方面の轉到——生理  
的・解剖的(心臓を以て)——疾病  
的 (*Vice* の *Weakness* 此の研究を以て)



診断ダイグノシ—既往症の品別—病原論カクシヤオヒ  
—病変論—治療法—看護法—衛生  
—小児科—婦人科

(第五) 個人作悪の四大因縁 (病原論に比す)

悪(疾病)は存る熱病を以てして  
做し便立上りるる病原論に移る—性  
論—自衛性と社交性—作悪因  
の二大別—生得因と習得因—習得  
因の二大別—知不足と意不足—四大因

果樹園

—没同感と薄志—倫理観念の不成  
確と不他を

(第六) 現行徳育種々案の批判

現行案を漢方醫術の治療法に比し—  
若しくは庸医—若しくは又三つ—  
—Mesopneumicを以て—Pathology  
の知識—生理解剖を以て—  
経験的知識なる—其の如く—  
(オニ志甲)—知不足又と意不足—其  
—二つ—療治—



病に疾を治せよの意を以てする事  
 生の衛生を以てする事 — Hygiene 衛生  
 Dietetics 栄養学

(第七) 倫理上の所謂善とは何ぞ(徳義論)

Vice の weaknes 弱さ 徳を以てする事  
 Virtue の weaknes 弱さ 徳を以てする事  
 徳を以てする事 — 徳を以てする事 — 徳を以てする事  
 徳を以てする事 — 徳を以てする事 — 徳を以てする事  
 徳を以てする事 — 徳を以てする事 — 徳を以てする事

東洋風教

一 佛敎の戒律(十善十惡) — Christianism  
 Precepts — 十倫の戒律 — Aristot — 十の徳  
 十九徳 — 十の徳 — 十の徳 — 十の徳  
 一 其の多義曖昧 — motive, objects  
 method, end, consequence  
 正と善とを以てする事 — moral ideal の  
 推論 — 善と善との間の区別 — 善の徳  
 定義 — 私慾 — 善と善との区別 — 社会  
 を以てする事 — 自我の善

(第八) 倫理上の所謂善とは何ぞ



目的観と形式観——究竟目的と方便目的——  
 社会保持は人生の方便目的——私慾——  
 以て——忠恕の善徳を以て——Summum Bonum  
 此の問答は倫理上の名義問答（即ち理学的的  
 生活上の問答）治療上の學問問答に  
 なること——徳育と所謂方便目的を以て  
 すると刻下の急とすべし

(第九) 矯弊概論

心理論——性——衝動——質——Temperament

東洋製

詳論——質の四大別の表裏——性、質、習  
 の關係——「克己復禮」——*contenance* の  
 必要——*Habits* 即 *virtues*——詩(文字)書(態)  
 文(雅)(善習の型)樂(美術)——幼年、  
 青年、壯年、老の四期を以て矯弊法——  
 徳育の宗教家——倫理觀念不成熟の  
 非行者と善悪無知の非行者——世故人  
 情と解——*Senes* とは性情の純  
 なる *Blind Senes*——倫理知識の  
 闡明と善悪の陶冶とのあり



(第十)幼年徳育の通法(禮論)

禮と

Benevolence, Beneficence,

Sympathy, Goodwill, affection,

等の幾一practiceの形式—Order

Systematicの形式—中庸の形式

(第十一)音楽論

(第十二)没同感とほ志との治療法

(第十三)学校に於ける徳育及徳育の要素

個々徳育と混淆徳育—学校を以て

治療法を以て行ひ易くすること

徳育論

養體治療を行はざること—只折々の  
教育治療を施し得ざるは—是れ  
学校徳育の必死の病であらざるを  
的とするを以て—徳育の要素を以て

(第十四)倫理知識教授法

其の原理—性、賢、習の關係—性習  
陶冶の才—歩—その善惡を根本觀念の  
闡明—其を根柢表巻四—修徳  
の順序階級—その修身奉公訓別  
表巻四—唯わ我の行に必階—



國家主義と人類主義——快樂主義と自便  
説——理想の解——倫理論綱要（攝  
成の批判）——高等女子校用

（第十五） 家庭との關係

（第十六） 寄宿舎——理想の組織如何

（第十七） 遊戯——運動會（競技會）——是會  
終号施り其の真分如何

（第十八） 倫理教科書——小学用——中学用  
高等女子校用



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

線  
樣  
原  
數



以下  
3丁  
白紙



○希臘道德

才一

列邦樹立、血族割據

私情 私縁 私誼 私徳

親戚 妻子

○基督教道德

才一

世界平等 四海同胞

非リ恥多し 兄弟皆同胞

恥辱多し 美徳多し

優劣多し

公徳を貴ぶ 同善持出

を父母 之を妻子

世の敵を交ふ

基督のこゝろあり



才二

自由、共和 平民主義

對等 競る)

平等主義 — 頭ノ押、

争ふ事、平等主義

(征服者と被征服者市

民と元南米の平等

ありありと云)

神及天を信する觀念

才二

絶對平等主義 — 神子

論

頭上ノ神を即ち頭ノ押

争ふ事、平等主義

平等主義 — 神を即ち頭ノ押

善人と悪人との平等

争ひの事



才三

市民の冬の夜、社会の上の事  
業もはやその法上の事業  
をたもとの事、私達の地  
うさ

才三

才三をたもとの事、私達の地  
うさ  
不修一言、方、因陋

原典

才四

人間をたもとの事、私達の地  
うさ  
とりの根本概念 - Skill  
Action + acting の fact  
に支脚をたもとの事

才四

人間をたもとの事、私達の地  
うさ  
とりの根本概念 - moral  
judgment の fact  
に支脚をたもとの事  
排習をたもとの事、私達の地  
うさ



才五

自然主義 - 率性主義

但し現象よりそのことを重

しうすへしとの主義

中庸主義

中庸を又了んば子ノ如

くとも其現象より四則也

〜

主観主義

Knows thyself

不自欺

才五

人智を蒙るの源一死外

は其の排斥を以て至窮

論一復初主義一億眾

論一排斥主義一自卑

↑主観主義一自然主義

↓主観主義一断

絶主義

東洋思想

才六

人間形成主義 - Pan-

fectionism - 力行大成

主義

才六

凡人を亡して起自然

人を感生せしめざる可

くは、新熱主義

非現象主義 再生

未来 献身 慈悲

名我 三才化

準教育主義







内丸

凡る年

三才

凡る史十卷

基督教の歴史

- (1) 個人主義の発展
- (2) 民族主義
- (3) 剣道の発展
- (4) 浮世草子
- (5) 漫遊伝
- (6) 女性の発展
- (7) 邦文の発展
- (8) 権威主義



















か

北條泰時	北條時房	中原師貞
三浦義村	中條家長	沙彌行正
町野康俊	矢野倫重	沙彌行然
後藤基綱	大田康連	佐藤業時
沙彌行由		

高の台海らるるもその武勇は徳あり、又経國  
 臨るも異所ありしをそとてそとに徳を以てあり  
 とそのもろし

此の武勇は高の武勇に武士をよき奉戴せし  
 しとよき武勇の終るるも氣を以て振え文の

東鑑

收するも武士を道の行義を表す記述文  
 の由に仲家ありし史を以て揮を以て揮を  
 与ふる依りていふこと、末文と即ち如左  
 表し一事なりと巻七曲折を以て、道は如左  
 梵天王釋四天王、總て四王、二十餘少  
 大木非徳、強々伊豆、果報、あま権現、三島  
 古所非、八幡大菩薩、天湯大自在天、那部  
 類眷属、神四別、四別、各四別、各四別、各四別  
 乃ち  
 其も墨月、其も墨月、其も墨月、其も墨月、其も墨月  
 う勤を以て振えし、其も墨月、其も墨月、其も墨月、其も墨月、其も墨月



小異ひ言く式目の口禁てを直に取在りたるあり

○然谷直之文

佛地之通のともて人ひも善人ふおとそやせしむ  
佛地のお陰さう然谷直之文の善いもに人  
るに俗衆もゆるさる人とりて捨つす而も  
すやまをちのみ及りて若屋の向く然谷直  
出家して教甚の善持を帯りての事と太宰  
徳夫さく言ふも思ひえりもあけり、佛の福も長  
門の人さう其流る大江産え神り地といふ所の長  
門のありと、直之文一旅を田地の邊をるひけり及

いしと直之文口禁しておはるる其情なるに  
お出家すと見え、とみくさるるをたす、  
助けしきんひそのを院を作あの出、  
とて言のすむさし、尚、法然日上人侍に、  
上人月輪庵を修を請也、とて、供の修をし  
傍次の間を尺伸す月輪庵いさうあは  
坂五段さういさう人をも問ひ、  
こみさゆしなして及ん候ん然谷直之文  
とて、しとる取の刻の事、候ひし、  
佛地を直之文の申すも候とせしむこと  
あは、来鑑るもたす、  
載せらるる、直之



は抱きけらしき人となんておははらこの直支を  
そのしをさするは抱きよこの直支を  
情を松の庭を也言しとよふそのは佛  
又身を抱んたるを何んか敬ひ且つおはする  
の人をんや

○江戸時代のお様

江戸時代のお様の流しとゆへえとあつて  
うい、おゆかき火をぬくお様を抱く  
すうとよみ抱くあつたが、全体を  
く明るぬくあつたが、全体をぬく  
あつた

本  
巻  
六  
段

と抱き各流のお多守を後世の江戸  
目録より抱くお多守を後世の江戸  
流派の交際をつつと抱くお多守を後  
て向流お様お多守を後世の江戸  
抱くお多守を後世の江戸  
とき抱くお多守を後世の江戸  
よいえきをせし抱くお多守を後世の江戸  
お抱えかきをその内も抱くお多守を後世の江戸  
とお出入とも抱くお多守を後世の江戸  
を解読するお多守を後世の江戸  
かすの抱備をその内も抱くお多守を後世の江戸



















あまを多んとをのそよろしい位に  
在のいとよゆかやあはれに北條高時が亡ちむ礼人が  
その後領を失つたときも糧救しを彼れ昔を  
御物取し思へるちのたふさる礼家と戦滅  
す物しつたふあふ物しつと日皇は彼れが一身一衣  
をかたてたまふ死活の間難きこと彼等皇の勤王忠  
入るんちくす御儀の和衷のまき問答を願ふま  
皇あしんす  
北はち可村月足利と氏を海月しし中ふあめつ  
博事礼家忠臣の二班をるけつと  
大指の礼家とあふあしんす合禄を興し

東條長家

めり死すこと知つて大義を分ちし土岐頼通  
は當を勝へ乗とて支那の清國を射とるも  
光明天皇足利と氏を捕まへん迄のち咄人  
流つて皇々天皇一統の効もなきはゆ甲も天  
皇はたれも何にお痛ふかと其れはあめ  
の人士がわらう野事向ふはる御事とる  
とあしんす  
あめり礼家と文能もあしんすはあしんす  
あしんすはあしんす後すさんとし寧ろ礼家とあし  
博事あしんすも御事あめりあしんすあしんす  
礼家の御事とあしんすもあしんすあしんす



















或はを改むる切なき、然るに然るをを視る  
上果するよ政體の中をを故に視るに云  
ふも、我らも亦をを視るの如きもの  
政體の中をを改むるに安んずるを  
人々と共におうて、リリクを改むる時、  
較べてそのとを、この改むるを、  
故、この時の、英國の、  
うらうらうの、  
の、  
を、  
命を改むるを、

政體の改

依りて改むるに

○信仰と政治の(関係)

信仰と政治の(関係)の、  
又、  
の判断  
Judgment)の、  
極むるに、



--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

東  
林  
堂



以下  
3丁  
白紙



明治三十五年 第一  
月五日

吉岡州人



